

紹巴本源氏物語の本文史

——野村精一先生と潮廻舎文庫の共同研究を発端として——

上 野 英 子

一 はじめに——潮廻舎文庫の共同研究

野村精一先生は古稀で本学を退職後、鵜沼海岸にあった別荘を改築して潮廻舎文庫を開設。同所を研究所として自身の研究や、共同研究の企画、展覧会の開催等にいそしんでおられた。それらの研究成果は、潮廻舎文庫のホームページ、あるいは不定期で開催された展覧会などを通じて行われたが、最も力を注がれたのは「潮廻舎文庫研究所 年報」の刊行だったように思う。

同誌は二〇〇一年の創刊号から二〇一三年まで、一〇号にわたって刊行された。強く続刊を望まれつつも、体調不良等の理由により果たされぬまま終わってしまった。私設研究所の報告書ということでリポジトリ化もなされぬま

ま、今となつては幻の雑誌となつてしまつている。

ともあれ、総目次が掲載された最終号の頁を追つて行く¹と、その時々における潮廻舎文庫のありようや、テーマの展開が窺われて、興味深い。時に源氏絵だったり、時に琴山印のデータベースだったり、様々な試みがなされたが、二〇〇九年頃からは、いわゆる〈紹巴本源氏物語〉に集中していったように思う。春の中古文学会で久しぶりにお目にかかった折、紹巴本について熱く語つておいでだったのを思い出す。

詳細は後述するが、当時は、広島大学等を中心に『紹巴抄』に関する研究こそ行われていたものの、紹巴本に関する研究は殆ど行われず、僅かに、大津有二氏が「諸本解題」のなかで、「金子氏蔵紹巴本源氏物語」「京都府立図書館蔵

源氏物語」(写五三冊)「天理図書館蔵伝周桂筆紹巴一覽源氏物語」「蓬左文庫蔵紹巴筆源氏物語」の四本について書誌を報告されたに留まっていた。そういう意味で、潮廻舎文庫のこの企画は、紹巴本源氏物語研究の先駆けとも称しうるものだったように思う。

それにしても、かかる手つかずの本文、三条西家本の亜流にすぎないだろうと思われていた本文を、どうして取り上げるのか。共同研究を始めた当時、野村先生からいただいた手紙のなかに、次のような言葉が記されていた。一部を紹介する。

紹巴については、狭衣のばあいでもわかるように、湖月抄なりせば、存外源氏でも定本化されたかもしれないのですが、それはともかく、この紹巴をふくめて、たまたま池田先生(稿者注、池田龜鑑氏のこと)が投げ出したもののなかに、まだまだ「本文史」の問題が隠れているようなきがしてなりません。まあ、じぶんであればいいのですが、体力も落ち、かつは若い人たちにとつては勉強にもなるのではないか、という様な気持ちもあって、目をつけました。連歌史研究の成果もつかえるのではないか、とおもったのですが、要は、

大島本とか湖月抄とかいった、いわば完成度の高い本文ばかり相手にしては、活字本だけで論文をかいているてあいと、そんなに変わりはないさそうにおもうのです。

大半の人々が大島本で源氏を読み、大島本にのみ関心を抱いているような現状に対して、「池田先生が投げ出したもののなかに、まだまだ「本文史」の問題が隠れているようなきがしてなりません」という切り口と、「完成度の高い本文ばかりを相手にしては、活字本だけで論文をかいているてあいと…」という警告が、特に印象に残っている。

未開拓な分野への挑戦はどれも大変な労力を伴うものだが、戦略としては、まず共同研究チームを立ち上げること。次に、当時潮廻舎文庫が所蔵していた、五十一冊本と一冊本(行幸巻)という二種類の紹巴本源氏物語の写本をもとに、紹巴本源氏物語なるものを考え、そこから少しずつ対象を広げようということのようだった。

参加者はそれぞれ個人的な繋がりから声をかけられた。稿者の場合も、たまたま今治美術館所蔵「紹巴本源氏物語」の転写本を入手していた縁もあって、お誘いを受けた。そ

して全員、一文字昭子氏が撮影し、焼き付けてくださったCDを頂戴して、それぞれの自由な視点から、潮廻舎文庫の紹巴奥書本（写本・五十一冊）の調査・翻刻にとりくんだ。

結果、「潮廻舎文庫研究所 年報」の八号と九号は、次のような特集となったわけである。

第八号 特集「源氏物語紹巴本」の世界（二〇一〇年三月刊）

a 「紹巴本源氏物語」と『紹巴抄』 上野英子

b 「紹巴奥書本源氏物語」翻刻（まぼろし）（夢浮橋）

一文字昭子・小嶋仁子

c 浮舟の命運―「紹巴本源氏物語」の一異文から

野村精一

第九号 特集 続「源氏物語紹巴本」の世界（二〇一一年三月刊）

年三月刊）

d 潮廻舎文庫蔵「紹巴本源氏物語」 藤井日出子

e 潮廻舎文庫蔵『源氏物語』について 中城さと子

更に翌年、一文字氏が日本女子大の雑誌に次の論文を発表された。掲載誌こそ異なるが、一連のものである。

日本女子大学「国文目白」五十一号（二〇一二年二月）

f 小野に吹く風―潮廻舎文庫蔵、紹巴奥書本源氏物語の異文から― 一文字昭子

右の六本の頭には、私に（a）から（f）の記号を振っておいた。論文によって少しずつ呼び名が変わっているものの、六本とも潮廻舎文庫蔵（現在は、旧蔵）の紹巴奥書源氏物語（写本・五十一冊）を取り上げている。

内容は、（a）（d）（e）が、該書の書誌や、本文に関する位相調査をまとめたもの。（b）は幻巻と夢浮橋巻、（d）は篝火巻の翻刻と校異。（c）（f）は該書の独自異文をどのように解釈するかといった視点からの研究論文である。

結局のところ、この共同研究は、潮廻舎文庫本の調査とその本文がもつ意味を論じ始めたところで終わってしまった。拙稿にしても、今読み返してみると、見えていない点が多々あった。そこで本稿では、これらの成果を適宜紹介させていた上で、もう一度、紹巴と彼の源氏物語本文について判明したことを、まとめ直しておきたいと思う。なお既述した通り、（a）から（e）までではリポジトリ化されなかったが、日本女子大の研究誌に発表された（f）はインターネットでの閲覧が可能である。

二 紹巴が師事した人々―周桂・昌休・公条

連歌師里村紹巴は、『続近世崎人伝』によれば、奈良生、本姓松井氏。幼くして興福寺明応院の喝食となり、初め大東正云に連歌を学んだが、たまたま南都に訪れた連歌師周桂について密かに上京したという。

【周桂】

周桂（別号 桑宿齋）は宗碩の弟子。師と共に三条西実隆に近侍し、連歌を卷いたり、実隆が請け負った源氏本の書写・校合を手伝ったり、地方大名とのパイプ役を務めていた。宗碩没後は宗牧と共に連歌界の指導者的存在だったようである。

また自身の源氏本も所有していた。『実隆公記』によれば、大永五年（一五二五）頃から作り始めたようで、当時実隆が用いていたところの源氏物語の写本（大永本）を借用した記録も残っている。そして大永七年にひとまず完成し、翌年実隆に外題の揮毫を所望した。後代、困窮のために（大永本）を売却した実隆が、新たな源氏本を作成しようとした時、この周桂本を九冊借用している。この点を見るに、周桂が（大永本）を転写したのは九帖だった可能性もある。この本をひとまず（大永八年周桂本）と仮称しておく。

現存する紹巴関連源氏物語諸本のなかに、周桂本もしくはその転写本とみられる本文が二種ある。ひとつは天正四年（一五七六）、周桂自筆の源氏物語（五十一帖）に紹巴が不足分の四帖を追補し、全帖を数度にわたって校合したというもの（後述④⑤⑥⑦⑪参照）。④は当該原本の端本か、あるいはその転写本。⑤⑥はツレ。この⑤⑥と⑦、更に⑪は、天正四年周桂本を用いて校合した本文と思われる）。

もうひとつは文禄二年（一五九三）、紹巴が周桂筆五十四帖を一覧し、朱を入れたというものである（後述⑮）。原本か。但し虫損のため五十四帖中六帖のみ閲覧）。

天正四年本と文禄二年本と、どちらが（大永八年周桂本）なのか、どちらもそうでないのか、詳細は不明である。連歌師が源氏物語の揃い本を複数部作成していたというのは驚きだが、実隆がそうだったように周桂もまた、何らかの理由によって自身の源氏本を手放さざるを得ず、新しい源氏本づくりに取り組んだからなのか、或いは有力者に源氏本の作成を依頼されたからなのか。様々な可能性が考えられ、後考を待ちたい。

ともあれ、周桂が没した天文十三年（一五四四）当時、紹巴は若二十歳、当時連歌界の指導者的存在であった周桂にとって、師事して一年余にすぎない紹巴は、末弟の一人でしかなかったらと思う。そのような紹巴のために、

周桂本が譲渡されたとは想像しがたい。紹巴は五十二歳の時、そして六十九歳の時に、縁あって亡師周桂の書写本に再会したと捉えておく。

【昌休】

周桂没後、紹巴が就いたのは里村昌休である。昌休は武士の家柄だったようで、『寛政重修家譜』（巻二〇八）によれば、父弥次郎は細川高国に仕え、昌休自身は「いとけなきとき西三条内大臣実隆の許にあり。成長の後宗牧が弟子となりて連歌の宗匠たり」という。奥田勲氏によれば、天文十三年当時の昌休（三十五歳）は、必ずしも連歌界の指導者の立場にあったわけではないが、「この頃前後して周桂・宗牧という二先達が没し、連歌の世界に空白時代が現出し、ひとつの成り行きとして、周桂、宗牧に師事していた昌休が指導的な立場に立たされることになった」と分析している。

そして天文十九年（一五五〇）、昌休は源氏物語の注釈書『休閒抄』をまとめた。奥書の文言をよむと「河海・花鳥・弄花」と並んで「宗牧老人説予聞書」も重要な基本資料だったようである。井爪康之氏は『休閒抄』には昌休の師、宗牧説が多く引用されているとして、昌休がかかる注釈書を作成した理由について、次のように述べている。

源氏物語を読むのに注釈書を思いのままに手元におくことは不可能に近かった。数少ない注釈書を手がかりに講釈されるのを聞きして自らの注釈書を作成するのが比較的手取り早い注釈書の作成方法であった。

『休閒抄』が完成した当時二十六歳だった紹巴も、三十九歳時には『紹巴抄』をまとめあげたわけだが、井爪氏は『紹巴抄』の基本は、この『休閒抄』によっているという。そして例えば『紹巴抄』の京都大学国文研究室蔵天正七年本奥書に「此二十冊者右府入道殿公条公称名院殿三条西殿御講釈 予聞書也」とあるのは、紹巴が殊更に權威を欲したためで、実際は「公条晩年の説を集大成した講釈を聴聞したり、これをまとめた注釈書を手にするとはできなかつた」ろうとしている¹⁰。

なおこれに対しては、『紹巴抄』には『三条西公条自筆稿本 源氏物語細流抄』等に見える公条の追加注の一部が取り込まれており、「三条西家直流の注釈書類には存しない注をも入手しえた」という小川洋子氏の指摘もある¹¹。

昌休は『休閒抄』を作成した二年後に没したが、井爪前掲書によれば、『休閒抄』諸本のなかには内閣文庫本のような、「私本本」といった出典表記のある書入れ注を有する伝本も存在することから、紹巴は『休閒抄』を所持し、

勉強していたろうとしている。だとするならば、同時に紹巴には、昌休が所持していた源氏本もまた許されていたのではあるまいか。当時の紹巴は昌休の女婿となっていたためか、昌休からは嫡男弥次郎仍景（昌叱、当時十四歳頃か）の後事を託されており、里村家の将来を担う立場にあったと思われるからである。

【公条】

紹巴が三人目の師として三条西公条に接近するようになったのは、天文二十一年（一五五二）頃からだろう。奥田勲氏の指摘によれば、同年九月、紹巴が校合した『仮名文字遣』に、おそらく紹巴から頼まれて、公条が次のような奥書を起草したという。¹²

此一冊 小僧紹巴以数多之本考勘之 而舛謬猶有之
先哲書校書如塵埃風葉隨掃隨有云々

天文廿一重陽日記之

称名野釈御判

「小僧紹巴」とあるが、当時紹巴は二十八歳である。

また翌年二月から三月にかけて公条が吉野を遊覧した時にも、紹巴は随行した。その時の公条の旅日記『吉野詣記』¹³に、

紹巴とてつくばの道に志ふかくて、此ころ都の住居し侍りて、夜ひるきとぶらひける。

とあり、昼夜をわかず公条亭を訪れていたようである。

天文二十二年（一五五三）当時、公条は六十七才、二年前には、嫡孫の夭折が契機だったともいうが、右大臣を辞任して出家（法名仍覚・称名院）していた。そして嫡子実枝（当時、実澄）は前年から駿河国に下向中であつた（以後実澄は七年間、京を離れることになる）。源氏物語関連でいえば、三条西家には享祿四年（一五三一）に完成していた源氏写本（日本大学蔵三条西家証本）があり、公条自身も天文十一年（一五四二）に『明星抄』をまとめていた。一方の紹巴は同年の正月二十日、近衛家歌会に参加し、その注記に「連歌法橋紹巴也」（『言継卿記』）と記録されている。連歌師として、ようやく貴族社会の一角に認められ始めたようである。

連歌師たちは皆、公家衆との繋がりを重視していたが、紹巴の場合「夜ひるきとぶらひける」と形容されるほど熱心に詣でていた。その背景について木藤才藏氏は、これといった門地の出でも無かつた紹巴が、連歌界名門の出であつた好敵手宗養と相対し、里村家をもり立ててゆくためには、並大抵でない精進、連歌のみならず古典の知識を身

につけることが要求されていたからだろうとする¹⁴。

以上、紹巴が係わった三人の師についてまとめた。次節では書写・校合・加點・加証等、何らかの形で紹巴が関連したとみられる源氏物語写本を軸に、これに幾つかの関連事項を加え、紹巴が源氏物語の写本作りにどのように関わっていたのか、年代順にまとめておく。

三 紹巴の源氏物語本文史

天文十三年（一五四四）、紹巴二十歳

■二月 紹巴の師、周桂没。これ以前、周桂には三条西実隆の源氏物語写本、この当時は〈大永本〉を借用して作成したところの〈大永八年周桂本〉があった。それと同じか別かは不明だが、後述する④⑤⑥⑦⑪、そして⑮も、周桂自筆本に関するものである。但し周桂没後、末弟の一人に過ぎなかった紹巴に、その源氏本が遺贈されることはなかったらうと思われる。

天文十九年（一五五〇）、紹巴二十六歳

■九月、里村昌休『休聞抄』成る。昌休は二年後に亡くなるが、次の奥書に拠れば嫡子昌叱の養育を託された紹巴には『休聞抄』も託されたようである。

右抄物者 河海花鳥弄花用捨之篇 併宗牧老人説予聞
書等 悉一所書載之 連々終其功 十五冊調之畢 更
莫許外見而已

天文十九季秋上旬

昌休判

（尊経閣文庫本『休聞抄』卷末）

天文二十三年（一五五四）、紹巴三十歳

■秋、公条の『石山寺月見記』によれば、

去年の秋頃、源氏物語の事など、これかれ物語して、八月十五夜石山寺にて、かの式部が筆をたてし昔の事、或説ながらかたりつたへたる、あはれ通夜して、かしの月見侍らばや、と申てすでもおもひたち、俄に法楽のため、かの名号を上にするへて、十五首の歌をつづりしかども、さばる事ありて、むなく過し侍り、此事を金后きこしめしつけて、さらば参詣あるべきよしあり。もとより此物語にふけり給て、蓬屋に日々おはしまして、読中一部の功をとげおはしましたり。又宗養法師、紹巴法師、これも同聴のともがらなれば、いざなひ侍しに……。〔傍線部稿者〕¹⁵

とある。同著は天文二十四年の作なので、文中「去年の秋頃」とあるのは天文二十三年のこと。また「金后」とは近衛尚通の男、大覚寺義俊のことである。義俊もまた源氏物

語を好んだのだろう、「蓬屋」（公条亭）を訪れて源氏講釈を聴聞し「一部の功」を遂げたという。また宗養や紹巴も同坐していたとしている。紹巴にとつては、これが公条から受けた最初の源氏講釈だったのかもしれない。席上、公条は「或説」として石山寺伝説に言及した。そして、石山寺で琵琶湖に映る八月十五夜の月を見に行こうと話盛り上がったが、「さはる事」があつて断念、翌年に持ち越されることになったとある。

天文二十四年（一五五五、弘治元年）、紹巴三十一歳

■三月、公条は宮中で源氏物語を進講している。但し宮中での行事のため、紹巴が聴聞できたかどうか疑わしい。不参加とみたほうが妥当だろう（『お湯殿上日記』）。

■八月、公条は、前年断念した石山寺詣に、大覚寺義俊・宗養・紹巴らを伴い和歌・連歌の席を設けた（『石山寺母見記』）。

■閏十月、公条の源氏講釈が始まった。『源氏物語竟宴和歌』によれば、

永禄三庚申年十一月癸酉、今日源氏物語講竟宴也。：
源氏物語にしくはあらじと心をかけし也。手づから一

部をうつつしつゝ見るにも。猶意味をふかくしらまほしくても。齡すでにかたぶくゆへ。いか、と思ひながら。朝にきく理りに思ひかへし。入道前右府に此物語相伝の事あながちに望しに承諾あり。二条前博陸。是もこの志深くおはしければ。あひかたらひ。彼亭にて弘治元年閏十月廿七日桐壺巻をあげぬ。次第あなたこなたに講ぜられしに。橋姫巻にいたりて。永禄元年の六月まで聴聞するに。又はからざる泉州兵おこりて立歸り。中絶する事頗尺魔也。然に此頃静謐せしかば。八月廿九日に上洛して。暮秋の期に再興し。仲冬丁卯に功終ぬ。：。16

右の引用文のあとには、講釈の修了を祝って、種通が土佐将監に石山寺紫式部図を描かせ、公条には賛を依頼した

こと。その絵が完成すると、影前にて「貴賤をえらばず、この巻の名を採題にして」歌会や連歌を催したこと等が続き、詠者の中には紹巴の名も見えている。

稿者は以下に述べる三つの理由から、この講釈を紹巴も聴講していたらうと考えている。

第一の理由は、『松梅院禪興日記』によれば、禪興も又「九条殿」(植通)に誘われて、このときの公条の源氏講釈を聴聞しているからである。

弘治二年(一五五六)

三月二十一日：昨日九条殿より、ていふく院を給候。

源氏をき、候へと御申候。

三月二十二日 八せへ参る。源氏をかりに参る。をひ

一すちまいらせ候。

三月二十四日 源氏き、に参る。九条殿へ一ろう二荷、

せう明院へ十帖一本也。：

植通に誘われた禪興は、翌日には早速源氏本を入手(借用したようである)、その二日後には源氏講釈を聴聞し、以後滯標巻から順次聴聞している。この時禪興が参加した「源氏」とは、时期的にみても、植通から誘われていることからみても、公条の源氏講釈だったに違いない。どうやら公条の源氏講釈は、古今伝授のような、秘匿性の高い個人的なものではなかったようである。

第二の理由は、同じく禪興の日記に次のようなくだりが見られることである。

弘治二年(一五五六)

五月二十二日 西殿にて源氏聞、野分也。末は□す候。

弘治三年(一五五七)

四月十二日 西殿へ参る、梅かえの巻はて候。

五月十二日 西殿へ参る、若南下はて候。

文中にある「西殿」とは三条西家のことであるから、公条亭が会場となることもあったわけである。

講師の自宅で開催され、周囲の人々にも参加を呼びかける等、こうした源氏講釈のありようは、実隆が自邸で行った幾度かの源氏講釈にも散見し、実隆以前は一条兼良が自邸で行った源氏談義にも見られたものだった。¹⁸ しかもそれらの聴聞者たちは公家だけに限らず、武家・地下の役人・僧侶・連歌師なども含まれる時があった。植通発起公条の源氏講釈もまた、こうした流れに添ったものだったのでないか。これが第三の理由である。

奥田前掲書によれば、この時期になると、紹巴の公条亭詣では一層頻繁になったろうという。¹⁹ かかる紹巴が公条亭の末座で講釈を聴聞していた可能性は十分に考えられ、だからこそ『源氏物語竟宴和歌』にも参加できたものと思われる。

■二月 紹巴は奈良の旧友の依頼により、数年にわたって取り組んできた源氏物語の校合を終え、奥書を草した。この時に完成した源氏本の転写本が、

①潮廻舎文庫旧蔵紹巴奥書本源氏物語（写本五十一冊）
 と思われる。①には、桐壺と夢浮橋の奥にそれぞれ次のような本奥書がある。

這源氏物語五十四帖者 故郷南都旧友依懇望 累年
 時々遂校合 卷之首尾加奥書 贈彼老人之几上者也
 頗可謂証本乎

弘治三丁未二月日 臨江齋紹巴在判（桐壺）
 本云 這源氏物語五十四帖者 故郷南都旧友依懇望
 累年時々遂校合 卷之首尾加奥書 贈彼老人之几上者
 也 頗可謂証本乎

弘治三丁未二月日 臨江齋紹巴在判（夢浮橋）
 これは、管見に入った紹巴関連源氏物語諸本中、最古の年次を有するものである。但し弘治三年の干支が合わないこと（正しくは「丁巳」・夢浮橋巻奥書が「本云」で始まっていること・「在判」とのみあって実際には花押が押されていないこと等から、弘治三年本の転写本の流れを汲むものと思われる。

なお紹巴が校合していた数年間は、公条の源氏講釈を聴

聞していた時期と一部重なっている。思うに、紹巴も又、種通や禪興と同様に、自身の源氏本を持参して講釈に臨み、公条が読み上げた本文でもって自身の本文を手直ししていたのではあるまいか。つまり、この講釈によって紹巴の源氏本は、少なくとも橋姫巻までは、公条の源氏本と交差したわけである。南都の友人が紹巴に校合を懇望したのも、その背後に三条西家の本文があつたためかと思われた。²⁰

とはいうものの、転写本である①本はきれいな嫁入本で、校合跡は殆ど見られない。転写の際に、校合は均され本行化されてしまった可能性がある。共同研究（e）中城さと子氏によれば、南都連歌界の連衆によって清書の書写された一本ではないかとする。

また潮廻舎文庫の共同研究（a）によれば、『紹巴抄』の所用本文に①が用いられたか否かを、若菜上を中心に調査したところ、以下のことが分かったという。

- 一、『紹巴抄』若菜上巻における見出し語の依拠本文は、
 ①および三条西家関連諸本（日本本・書陵部本・肖
 柏本・天理図書館蔵周桂本）中、最も①に近いとい
 うこと

二、『紹巴抄』若菜上巻見出し語の約91%は、依拠本文
 に忠実に採用されたらしいこと。

三、異同のみられた約9%の事例中、約4%は、その原

因が誤写「は」の添加・原文の部分引用といった『紹巴抄』側に求められるようだということ

四、『紹巴抄』の見出し語のなかには、稿者が参照した源氏物語諸本中では独自異文となったものの、『林間抄』『林逸抄』の見出し語とは一致した事例も散見し、両注釈書との密接な関係性が窺われること。

潮廻舎文庫の共同研究（d）藤井日出子氏は、①の篝火巻について以下のことを報告した。

五、①を紹巴講釈の書入れ本とみられる中京大学本や鶴見図書館本と比較した結果、この三本はきわめて近い本文であったこと。

六、①を三条西家の本文（書陵部本・日大本・蓬左文庫本）と比較したところ、書陵部本・蓬左文庫本・日本本の順に異同数が少なかったこと。

七、①を書陵部本・蓬左文庫本と比較すると、①は書き入れ後の蓬左文庫本の本文に近かったこと。

なおその後、稿者が三条西家の本文を調査したところ、書陵部本の篝火巻は書陵部本のなかで唯一実隆が書写を担当した巻であり、その底本は当時実隆が用いていた（文明本）だったらしいことが判った。²¹ また蓬左文庫本は、天文二年（一五三三）実隆が起草した奥書によれば、孫実枝（當時、実世）自身が発意して作成された写本である。三条西

家の本文を、三条西家の人々及び当時の貴顕らにも依頼して書写したものでろう。

また諸本の異文注記に注目した共同研究（e）によれば、①は「称名院殿御本化」があまり進んでいない時点での本文をもつとしている。

永禄二年（一五五九）、紹巴三十五歳

■二月 奈良在住の連歌師林宗二による『林逸抄』が成立した。天利図書館蔵自筆本『林逸抄』夢浮橋巻末に

永禄第三曆竟集己未仲春十日 方生齋灯下抄之畢 数ケ年間苦勞而已

宗二六十二歳（花押）（印「方生」）とあるが、「永禄三年」とあるのは、干支ならびに宗二の年齢からみて、永禄二年の誤写という。²²

著者宗二について、『中院通村日記』には「林逸 町人マシジウ汁宗爾／聞書、遣遙院講也」（元和元年七月十九日条）とある。通村と宗二とは年代が離れ過ぎていることから、父通勝か外祖父幽齋からの伝聞記事と思われるが、宮川葉子氏はこれを信憑性のある情報とみて「宗祇・肖柏の講釈を得た実隆の講釈であったが故に、『林逸抄』は宗祇・肖柏等の説の集成に見えると考えざるべきではないか」という。『林逸抄』に及ぼした三条西家源氏研究の影響を認めてい

るようである。

また岡寫偉久子氏によれば、²⁴

『林逸抄』各注の基本としてまず記されているものは、
出典書名のあるなしにかかわらず『休閒抄』『一葉抄』
注釈本文のどちらかであることが多い。

という。先行注の引用については、両書いずれかに引用されている注をそのままの形で記している場合が多いこと。とはいうものの、両書に漏れた先行注を取り込んでいる場合や、先行注が適宜切り取られ、組み合わされて一つの注となっている場合もあることなどから、先行注をすべて手元に置いての編著だろうとする。

なお陽明文庫本『林逸抄』夢浮橋巻末によれば

方生齋宗二学窓於机下一遍自誦令成就已後 居士講釈
致発起畢之後 秘抄此本林逸传授之処也 雖然御存生
之間二不遂書写中絶之処 嫡孫宗伯公へ申出

文禄第四南呂中一日書写畢 紹巴（花押）

とある。どうやら紹巴は、宗二の講釈を聴聞しており、未だ秘抄となっていた『林逸抄』の伝授も許されていたものの、なぜか書写は中絶したようである。そして文禄四年（一五九五）、宗二の嫡孫宗伯に申し出て、書写を終えたということかと思われた。

永禄六年（一五六三）、紹巴三十九歳

■新写の寄合書き源氏本つくりには紹巴も参加した。彼は十帖分の書写を担当し、全帖に朱点・句点を施した。次の②③がこの時の写本かと思われる。

②『思文閣目録』一一〇号（平成元年七月）掲載「紹巴本源氏物語」（写五十冊）

③潮廼舎文庫旧蔵『源氏物語御幸』（写一冊）

『思文閣目録』によれば、②は近衛信尹・紹巴・昌叱・道澄・覚勝院・南都社家等総勢三十名によって書写されたもので、「紹巴を中心とした、室町末期最高水準の文化人達によって完成された写本群」だとある。椎本と蜻蛉の巻末に「永禄六年写」の墨書がみえ、桐壺と朝顔以外の各帖紹巴の筆とは別に、「永禄六・八・九 一校了」の識語があるが、これはその付近に書き入れられた「南都社家中東」（「中東」とは、南都春日大社の社家のなかの大中臣の意味）と同筆と思われる。

②が掲載された『思文閣目録』の写真、ならびに書誌情報からみて、③は明らかにそのツレと判断できる。²⁵

■十二月 仍覚（公条）薨去

紹巴は『紹巴抄』冒頭の、料簡に相当する箇所、公条

のことを

▲称名院殿右府／道遙院殿御二男 道遙院殿にもこえたる御才覚にて、古来と、こほれる義理を御糾明ありしもの也。仏教・儒道・和国の事の通達のはとは、しるしかたきのみ²⁶

と評価した。公条は父実隆のような長大な日記を残していないため、不明な点が多いのだが、紹巴の証言によれば、私に引いた傍線部にあるように、実隆以上の学識だったという。

また『紹巴抄』料簡の「時代」項で、紹巴は自著の成立について次のように記載していたのだった。

時代寛弘初造出之 康和流布 誠五条三品京極黃門之比賞翫云々 従寛弘文明十年迄四百八十余年也 従文明永祿六年迄九十五年也 以上五百八十余年計可成歟 これは、源氏物語が作成された「寛弘初」から「永祿六年」にいたる迄の源氏物語享受の流れを示したもので、私に施した「印までが『弄花抄』の記述と重なり、以後が紹巴の続けた部分となる。そこに公条が薨去した「永祿六年」を置いたのは、公条による源氏研究の終焉をもって区切りとし、その時点で自著を置いたということである。

永祿八年（一五六五）、紹巴四十一歳

■二月、紹巴は昨年からとりかかっていた『紹巴抄』を完成させた。広島平安文学研究会『平安文学資料稿 永祿奥書源氏物語紹巴抄』には多くの奥書があるが、例えば

永祿七卯月廿日終功了 一校畢（夕顔）

永祿八二二六及黄昏終功了 去朔日日暮立筆

二十五日月次於私宅張行了」（宿木）

等とある。それまで『休閒抄』をもとに学んできた下地もあつてか、紹巴は初めての源氏物語注釈書を、公条薨去後僅か二年のうちに仕上げる事が出来たようである。

元龜二年（一五七二）、紹巴四十七歳

『覚勝院抄』中書本完成。覚勝院は公条源氏講釈の聞書をもとに、物語本文全文と注釈書とを合体させた新しい形式での注釈書を作成し、これに実澄の講釈（「三垂説」）も取り入れて中書本を仕上げた。そして此の後、穂久邇文庫本には、「三大・紹・永」等の肩付・尻付を付した注記が書き入れられた。紹永は時代的に合わないため、「紹」は「紹巴」か「紹九」の可能性がある。

元龜三年（一五七三）、紹巴四十八歳

■九月 紹巴は藤孝（幽齋）の要請により、勝竜寺域にて

源氏講釈を行った。実践女子大学常磐松文庫蔵『九条家本源氏物語聞書』第二冊七十九丁才に次のようにある。

元龜三九月勝竜寺之城にて藤孝御所望にて紹巴講釈あり 末座に侍て聴聞

天正三年（一五七五）、紹巴五十一歳

■七月、九条植通が、公条講釈をもとに『孟津抄』を完成。植通は前年四月に実澄より『源氏物語三箇大事』（日本大文学図書館蔵、但し同本にある「実隆」は「実澄」の誤写）も伝授していた。

天正四年（一五七六）、紹巴五十二歳

■七月、紹巴は亡師周桂の一筆本源氏物語（五十一帖）に不足分の四帖を自ら書写して揃い本とし、全冊を数度にわたって校合した。こうして出来た写本を（天正四年紹巴補写周桂本）と仮称するなら、次の④はその端本、ないしは転写本と思われるもの、⑤⑥はツレで、〈天正四年周桂本〉を用いて寛永二十年（一六四三）頃に校合したもの。⑦もまた慶安元年（一六四八）に校合したものと位置づけられるだろう。①は「周桂筆臨江齋所持」とのみあって紹巴補写の記述が無いため、本年譜では独立した一項目として扱ったが、同じく〈天正四年紹巴補写周桂本〉で校合した

本文の可能性が高い。

④ 東海大学桃園文庫蔵『源氏物語若菜上』（古写本一冊）

函架番号、桃6-120

表紙は後補の帛表紙（前遊紙一丁表がかなり日焼けしていることから、原表紙が取れて永らく共紙表紙となっていたものか）。表紙寸法19・5×21・5糎。左肩に帛題簽「古写本源氏物語三十四帖若菜上」を貼付。本文料紙厚手の鳥の子。片面十一行。後遊紙一丁才に本行と同筆で

此本可為証本者也

松月叟正徹□

とある（□は「判」を擦り消したものか。本奥書と判断した）。後遊紙二丁ウには、それぞれ墨色の違った二つの識語「周桂以自筆本校合畢」「紹巴所持本也」がある。本行には朱墨書き入れ多く、なかには「ココマデー日」「茲ニテ二日ノヨミ」といった書入れもある。

⑤ 東海大学桃園文庫蔵『源氏物語』（写本四十六冊、桐壺）

簾木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀・少女巻欠

函架番号、桃六-三十四

⑥ 東海大学桃園文庫蔵『源氏物語』（写本七冊、存桐壺）

簾木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀。函架番号、

桃6-52

右の⑤⑥は、現在は異なった函架番号を付されているが、もとはツレだろう。⑤⑥合わせると、少女一帖を欠く。⑤は共紙表紙だが、⑥は菱繫地に花を置いた空押黒色紙表紙である。⑤⑥の共通項は、表紙寸法(25・6×19・1 糎内外)。袋綴。本文料紙楮。片面十行。旧蔵印「一泓益中」等である。また、それぞれ次のような識語がある。

令校合之奥書 此源氏物語者桑宿周桂一筆也 但四冊
不足予書続畢 校合及数度者也

天正四年孟秋中澣

臨江齋紹巴在判

(⑤夢浮橋卷末)

紹巴自判ノ本ニテ句ニ文ニ遂再校畢 (⑥箒木卷末)

なお⑤⑥の成立年代を寛永二十年とみた根拠として、桐壺巻前遊紙に記された巻頭注(本行と同筆か)の次の注記をあげておく。

一、此物語書ハシムルハ寛弘ノ始ル也 康和ニ流布
殊五条三品京極黄門ノ比賞翫云々 寛弘元年ヨリ
寛永二十年迄千百八十一年歟

また共同研究(e) 中城氏の御教示で、次の⑦の存在が明らかになった。

⑦花園大学土岐武治文庫蔵

此源氏物語者桑宿周桂一筆也 但四冊不足 予書続畢

校合及数度者也

天正四年孟秋中澣

臨江齋紹巴判

慶安元仲夏 周桂筆紹巴奥書之以本 校合点句切無相
違書写畢 (桐壺奥)

天正五年(一五七七)、紹巴五十三歳

⑧金子氏旧蔵紹巴本源氏物語

この本文について大津有一氏は『源氏物語事典』所収「諸本解題」で次のように記す。

〔冊数〕五十四冊か〔体裁〕不明〔筆写〕不詳。室町末期の書写か。〔内容〕一面九行。本文の系統は青表紙本であろう。〔奥書〕桐壺の奥に「天正五林鐘四一校了 紹巴(花押)」、箒木の末に「天正五林鐘八一校了 紹巴」空蟬の巻尾に「天正五六九一校了 紹巴(花押)」「夕顔の奥に「天正五六十一校了 紹巴(花押)」などとある。花宴には「一校畢 紹巴(花押)」〔称名院殿御本二肖柏筆 京極黄門定家卿以自筆校合畢〕とあり、夢浮橋には「此源氏物語者奥州兼如及両度予講釈半 全部感得畢 兼載之余慶不浅者也 于時天正四膺八 紹巴(花押)」の奥書がある。〔参考〕『校異源氏物語』『源氏物語大成』に不採用。この稿『定本源氏物語新解』下の写真ならびに桃園文庫の探訪書の解説による。

兼如の祖、猪苗代兼載はかつて宗祇と共に連歌の最盛期を作り出した人物である。その五代目にあたる兼如は、天正四年に紹巴の源氏講釈を受講した。その時に（おそらくは自らの源氏本に）奥書を揮毫してもらったようである。花宴巻の奥書は、日本大学蔵三条西証本源氏物語の花宴の本奥書と通うものがある。なお該書には奥書の後天正五年六月まで、紹巴の校合識語が加わっている。これは兼如本を紹巴が一覧し、校合したということなのだろう。

天正七年（一五七九）、紹巴五十五歳

■正月二十四日 三条西実枝六十九歳、没（『公卿補任』）

天正八年（一五八一）、紹巴五十六歳

■五月 紹巴は成田氏長の懇請を受けて『紹巴抄』（再稿本）を送った。京都大学国文研究室本に

此二十冊者右府入道殿公条公称名院殿三条西殿御講釈予聞書也 武州忍成田総州依御懇望奉許畢 可被守御在名而已

□（虫損）時天正八年仲夏上旬

紹巴判

とある。稲賀敬二氏によれば、紹巴は永禄八年に仕上げた初稿本を、天正六、七年頃から増補改訂して再稿本を作成しており、天正八年に氏長に送ったものは再稿本系だろう

という。再稿本編集時の紹巴の手元には、初稿本時には無かった周桂本が揃っていたはずである。

■十一月〜十二月 紹巴の源氏本が校合に用いられた。この時、出来たのが

⑨ 京都府立総合資料館蔵源氏物語天正八年校合本（写五十三冊、須磨欠。函架番号キ 四百九三）

である。⑨は木箱入り。筐には「源氏物語 烏丸光宣筆五十三冊」と墨書されているが、烏丸光宣が係わったのは桐壺だけだった可能性がある。なぜなら該書は桐壺とそれ以外とは幾つかの大きな相違点を確認できたからである。すなわち、他が後補表紙であるのに対して、桐壺のみ青色無地紙表紙で中央に白色題簽、押竹の跡がある原表紙とみられること。本文料紙は他が裏映りの目立つ楮紙であるのに対して、桐壺のみが厚い鳥の子であること。識語は桐壺のみ「烏丸光宣卿筆」とあり、他の五十二帖には各冊巻末に

「以臨江斎紹巴法師秘本 校合畢」（朱書）

とあること。正確に言えば、箒木から初音までは右記の文言が記され、胡蝶からはこれに、天正八年十一月十三日から同年十二月六日までの年月日の記述が加わっている。或る人物が紹巴本を許されて、十七日間（天正八年十一月十二日〜翌月六日）で、急ぎ校合したようである。但し「紹

巴法師秘本」と校合したとする識語はすべて朱筆だが、本文中の朱筆は、句点鉤点を除き、かなり稀である。

共同研究(e)によれば、「紹巴法師秘本」に該当する本を割り出すため、⑪本箒木巻のイ注箇所(異文注記)に注目して、⑦⑨⑩本の四本の校異を調査してみた結果、紹巴補写周桂本とみてよいのではないかとしている。

■十一月 紹巴は大東和忠(紹九)²⁰の依頼により寄合書きに参加。桐壺を書写、一校し、奥書を起草した。和忠はかつて紹巴が南都で師事していた大東正云の息である。

⑩蓬左文庫蔵天正八年紹巴本源氏物語(写五十四冊・系図一冊、函架番号164.1)

該書は胡蝶装、本文料紙烏の子、片面十行。寄合書きで、桐壺奥に

此一冊者南都大東和忠依所望染筆者也 一校之次記之而已

于時天正八年仲冬望

紹巴(花押)

とある。共同研究(e)中城氏の御教示である。また『連歌総目録』には永正十二年(一五六九)から慶長四年(一五九九)まで、和忠と紹巴同座の記録が確認できるといふ。

猶、添付の系図は明応八年奥書の実隆系図であった。ま

た寄合書の参加者には紹巴の弟子紹九をはじめとして、南都連歌師立德・永俊、春日社家祐久・祐範(筆者目録)等の名が挙がっていた。

天正十一年(一五八三)、紹巴五十九歳

■天正七年九月から十一年八月まで、周桂筆紹巴所持本が校合に用いられた。

⑪天理図書館蔵「源氏物語」(写本五十四冊、天理図書館目録番号七五九)

該書は各冊に朱墨両筆による校合識語が加わるが、その中に

(墨筆)「天正七九四書 五日一校了 臨江本也」(以上、第十八冊目)

(墨筆)「右本者周桂筆臨江齋所持以本一校了」(墨筆)「天正十八月廿三日一校了」(朱筆)「朱点了」(以上、第二十三冊目)

(朱筆)「天正十一八廿六日朱了」(朱筆)「以臨江齋本校了」(以上、第四十冊目)

等とある。袋綴、縹色表紙で、本文料紙は楮紙。片面八行。夢浮橋の奥には「天正八十月廿日一校了」(墨書)を記したあと、『自筆本奥入』の定家奥書を記す。

天正十四年（一五八六）、紹巴六十二歳

紹巴の源氏講釈を受講した連珠なる人物が、発起して寄合書きで源氏本を作成した。後代これが佐渡に渡ったのだろう。それが⑫である。

⑫ 堀家旧蔵天正十四年紹巴講釈源氏物語

以下の補足は、上原作和氏に御教示いただいた「佐渡の『源氏物語』写本」（坂口昭一氏資料）に拠る。この⑫は堀家旧蔵（一九八五年、金井町に寄贈）の源氏物語で、写本五十四帖。寄合書き。袋綴。縦23・5×横18糎。片面九行。各帖奥に

天正十四丙戌 從紹巴法橋講釈 以本写之畢

とあるという。また桐壺のみ正副二部あり、正本貼付の付箋に「源氏物語老部連珠筆 此桐壺卷年来見え不申候 一ノ谷太郎右衛門方ニ有之候を故有て享保十五庚戌暮ニ此方へ参候 本望ニ存候」、複本の付箋に「此桐壺卷一ノ谷村道祐筆」とあるという。

また共同研究（d）によれば、「天正十四丙戌年 從紹巴法橋講釈本也」の奥書を有する次の二本があるという。

⑬ 中京大学図書館蔵『ゑあはせ源氏物語』（写本一冊）

⑭ 鶴見大学図書館蔵『源氏物語』（写本五十四帖 函架

番号913・36・M）

文禄二年（一五九三）、紹巴六十九歳

■三月、紹巴は周桂筆源氏物語を一覧し、識語を揮毫した。この時の写本と思われるのが、

⑮ 天理図書館蔵伝周桂筆源氏物語（写五十四冊十目錄・

函架番号913・36/183・154）

である。添付の目録には「連歌師周桂筆 源氏物語全部／奥書者紹巴」の極めがある。虫損激しく、空蟬・紅葉賀・関屋・幻・蜻蛉・夢浮橋の六帖のみ閲覧したが、表紙は押竹の跡がある栗皮表紙。おそらく原表紙だろう。夢浮橋巻末に、本行とは別筆で

此源氏物語遂一覧了

文禄二年三月望 法橋紹巴（花押）

とある。枳形本、列帖装、本文料紙烏の子。片面九行。本行には擦り消しや重ね書きによる訂正が多い。また閲覧できた六帖には朱筆による巻頭注の書き入れがあるが、これも紹巴か。各冊表紙右肩には近年のものともみられる付箋が貼付されており、そこに「三千二百五十七号 源氏周桂筆 篋入／朱書奥書紹巴筆 五十四帖」とある。

文禄三年（一五九四）、紹巴七十歳

■正月、九条植通（八十八歳）没。『戴恩記』に植通と紹巴の有名な逸話がある。

有時紹巴法師まいりて、「なにをか御覧なさるゝ」と申されければ、「源氏」。又「めづらしき歌書はなにか侍る」と問れしかば、「源氏」。又「誰かまいりて御閑居をなくさめ申ぞ」と申されければ、「源氏」と、三度までおなじ御返答有し。

慶長二年（一五九七）、紹巴七十四歳

■五月、圓山内匠助入道玄春の懇請により、新写の寄合書きに参加して閑屋巻を書写、また加証奥書を加える。この時のものとみられるのが⑯で、その流れをくむのが⑰である。

⑯今治市河野美術館河野信一文庫「慶長二年紹巴奥書源

氏物語」（写本五十四帖、函架番号226・71

196）*国文学資料館の紙焼きにて確認

⑰架蔵、空蟬・紅葉賀・幻・蜻蛉・夢浮橋の写本五冊

夢浮橋奥に次のような奥書がある。

此源氏物語者圓山内匠助入道玄春 往年歌道執心故

頃全部新調畢 御筆者目録別在之 閑屋巻染老筆之次

奥書而已

慶長二年仲夏下旬

紹巴在判七十四歳

空蟬の場合、⑯⑰は字母こそ異なるが、漢字仮名表記法は全丁殆ど一致する。但し現行の⑯は一丁才と二丁ウの間に、

約一丁分の脱文（「いとをしくさうくしと……いそきおはず」）があるが、⑰に欠落は無い。

寛永年間（一六二四〜一六二九）、紹巴没後

慶長七年（一六〇二）、紹巴（七十八歳）は没した。それから約二十年後にあたる寛永年間に、『紹巴抄』は古活字版として刊行された。源氏物語の諸注釈書のなかでは最も早い出版である。公条の『明星抄』の板行すら、明暦三年（一六五七）まで待たなければならなかったことを考えると、それより二、三十年も先んじた『紹巴抄』の刊行は、注目に値しよう。出版文化の黎明期においては、伝統と権威を誇った注釈書ほど、所有者側も慎重かつ保守的になっただだつたろうから、見方を変えれば『紹巴抄』にはそうしただしが見がなかったということなのかもしれない。

寛永古活字版『紹巴抄』の第二十冊目の後見返しには

此二十冊者三条西殿右府入道殿公条公称名院殿御講釈

予聞書也 武州忍成田総州依御懇望奉許可畢 可被守

御在名而已

于時天正八年仲夏上旬

紹巴在判

という紹巴の奥書があるため、底本は、天正八年（一五八〇）、紹巴五十六歳時）に、成田氏長の懇請をうけて紹巴が送った再稿本ということになる。底本の提供者が誰だったかは

不明だが、興味深いことに、この古活字版が覆刻・校訂され、整版本として再版された時、この識語は削除されたとい³¹う。

ともあれ『絵入源氏物語』『首書源氏物語』『湖月抄』に先んじて刊行された『紹巴抄』には、再版されるだけの需要があったということである。それだけに、当時の源氏物語享受世界に及ぼした影響力も大きかったろうと思われるのだが、紹巴本の本文が近世期の源氏物語本文に影響を及ぼしているという指摘も、『紹巴抄』の刊行と無縁ではなかったように思われるのである。

例えば前述⑤の箒木冊には、池田龜鑑氏による次のようなメモ（昭和六年七月三一日付）が夾んであった。

「この源氏物語は乙女の巻一帖欠にて、他は全部あり。本文を比較するに湖月抄の本文に最も近し。鈴虫の一帖は河内本に類す。よりに思ふに、この源氏物語は北村季吟が湖月抄に用ゐたる本と同系統のものになるべし。しかしてこの本の系統は周桂より紹巴に伝はりたるを知る……」

紹巴本ののち、近世の源氏物語本文はすぐそこまで迫ってきていたようである。

注

- 1 例えば、稲賀敬二編『永祿奥書源氏物語紹巴抄一（〜廿）』（平安文学資料稿、昭和五十一年、六十一頁、広島平安文学研究会）・井爪康之「連歌師の源氏注釈の流れ―休閒抄から紹巴抄へ」（『文教国文学』第二十号、昭和六十一年十月）・稲賀敬二「猪苗代兼如書写・書入本『源氏物語紹巴抄』―卜部吉田家旧藏本と架藏本と」（『古代中国文学』第四号、昭和五十九年八月）・中野幸一『源氏物語古注釈叢刊三 紹巴抄』（平成十七年武蔵野書院）など。
- 2 大津有一「諸本解題」（昭和五十八年、東京堂出版『源氏物語事典』）所収。
- 3 伴高蹊「続近世畸人伝」（昭和四年、『日本古典全集』第三期第一〇）
- 4 『実隆公記』大永五年七月十七日・同二十三日条、大永六年三月二十三日条。また大永七年六月五日条には「周桂源氏本書写功終云々、今日花散里巻持来、一部全備神妙く」とある。大永八年五月十四日条など。
- 5 『実隆公記』享祿四年五月二十二日条。
- 6 拙稿「ふたつの定家本源氏物語と三条西家本―付、実隆文明本の転写本としての紅梅文庫旧藏本紹介―」（実践女子大学文学資料研究所「年報」三十六号、平成二十九

- 7 年三月刊)
 7 紹巴の生年については、大永四年(一五二四)と大永五年、二通りの解釈がある。前者については、慶長三年(一五九八)紹巴自筆『連歌の式目』奥書に「七十五歳」とあることなどからの逆算。後者については、天文二十一年(一五五二)七月『阿蘇山長善坊契雅興行山何百韻』(内閣文庫本)の句上げに「廿八才 紹巴」とあることなどからの逆算。どうやら、四十歳代に、紹巴自身が年齢を一歳飛び越えて記録したのが原因のようである。本稿に於ける紹巴の年齢は、すべて大永五年説に拠った。
- 8 奥田勲『連歌師―中世日本をつないだ歌と人びと―』(平成二十九年、勉誠出版) 一三六頁。
- 9 井爪康之編『源氏物語古注集成22 休閒抄』(平成七年、おうふう) 所収「解説」八〇八頁。
- 10 井爪康之『源氏物語注釈史の研究』(平成五年、新典社) 二五四頁。
- 11 小川洋子『源氏物語抄(紹巴抄)』と先行注釈―三条西公条との関わりを中心に―(二〇〇九年、広島大学国語国文学会「国文学攷」二百二号)。
- 12 奥田(8)、一三九頁。
- 13 引用は、北谷幸冊・鈴木徳男・鶴崎裕雄「三条西公条」吉野詣記(翻刻・校注)』(一九八六年三月、『相愛女子短期大学紀要』三十三卷) によった。
- 14 木藤才蔵『連歌史論考 下』(増補改訂版、平成五年、明治書院) 七七八頁。
- 15 引用は、奥田勲「石山月見記について―含翻刻―」(一九七〇年二月『宇都宮大学教育学部紀要』第一部、第二四号) によった。但し一部改めたところがある。
- 16 引用は、『群書類従 第十七輯連歌部・物語部』(続群書類従完成会編、昭和三十五年訂正三版) 所収本によった。
- 17 引用は『史料纂集 北野社家日記』巻八(二〇一一年、八木書店) によった。
- 18 『実隆公記』には、明応十年六月から文亀四年五月までの粟田親栄発起の源氏講釈の他、永正八年六月の公条発起・定祐法眼発起・大永三年八月兼純発起等の各講釈多数。また兼良については『大乘院寺社雑事記』文明十年四月二十五日条参照。
- 19 注(8) によれば、天文二十二年(一五五三)の奈良・吉野旅行以後、「紹巴の公条参りがいっそう頻繁になったことだろう。山科言継が公条の邸に行く度に紹巴が来合わせている(『言継卿記』) ことでもそれはうかがえる(二四四頁) とする。
- 20 なお紹巴は二月にこの奥書を記している。この時点では、

同年九月に講釈が再開することなど予想できず、今回の公条講釈は橋姫巻までで終わったと判断していたのだから。う。

21 〈文明本〉の転写本であるところの紅梅文庫本と比較したところ、異同はなかった。書陵部本の寄合書きに参加する際、実隆は自身の本文を書写していたようである。拙稿(6)参照。

22 井川康之『源氏物語注釈史の研究』(新典社研究叢書 65、平成五年、新典社)。一八〇頁

23 宮川葉子『三条西実隆と古典学』(平成七年 風間書房) 七六〇頁

24 岡寫偉久子「解題」(平成二十四年 おうふう『林逸抄』所収)。

25 稿者のノートによれば、③潮廻舎旧蔵本は、詠映入り(峽題簽「源氏」物語 御幸 仁和寺任助親王筆/里村紹巴自筆校合句切)。表紙寸法23・5×16・3cm。縹色無地紙表紙。中央に書題簽「見ゆ支」。題簽右に付箋添付(「仁和寺宮任助親王筆」と墨書)。列帖装。鳥の子料紙。片面十行。朱点や朱の書き入れあり。奥書「仁和寺/御室御所」「朱点句切畢(花押)一校了」。表紙および奥書、花押等が②の写真と一致する。

なお『目録』によれば、②は五十帖、「卷十一・二十五・

三十九・五十四の四帖欠」とあるが、「三十九」は「二十九(行幸)」の誤りかと思われる。

26 引用は中野幸一編『紹巴抄 源氏物語古注釈叢刊 第三卷』(平成一七年、武蔵野書院)によった。但し私に句読点や傍線を施した。以下同様。

27 紹永は宗祇と百韻連歌(文正元年二月四日)を巻いている。紹九は奈良に於ける紹巴の連歌の師正云の息である。

28 綿拔豊昭「猪苗代兼如とその周辺―兼如の伝記を中心に」(『連歌俳諧研究』六十八号 一九八五年)。

29 稲賀敬二「源氏物語紹巴抄」と兼如―永禄奥書本資料―(『連歌と中世文芸』)。

30 『顕伝明名祿』の「紹九」項によれば、「南都連歌師大東正云子 俗名和忠」とある。

31 妹尾好信「源氏物語抄(紹巴抄)」の古活字版から製版本へ―項目異同から見た改訂の様相―(『広島大学大学院文学研究科論集』第六十五巻)。

(うえの えいこ・実践女子大学教授)